

「戦争と知識人」(ランドルフ・ボーン)

——翻訳と解題

前 川 玲 子

ここに訳出したものは、ランドルフ・ボーン (Randolph Silliman Bourne, 1886-1918) の論文「戦争と知識人」(“The War and the Intellectuals”) の全文である。「戦争と知識人」は、短命に終わった月刊文芸誌『セブン・アーツ』(*The Seven Arts*, 1916-17) の1917年6月号に発表された。ウィルソン大統領が議会に対独戦争を提議したのが1917年4月2日、議会が対独宣戦を決議したのが4日後の4月6日、続いて5月18日に選抜徴兵法、6月15日に防諜法が成立したことを思い起こすと、このボーンの代表作はまさにアメリカの第一次世界大戦参戦をめぐる激しい論争の最中に執筆され、発表されたことになる。1916年から17年にかけて書かれたボーンの一連の論文には、時代の激動を反映する政治的主題が多く、また、戦時に突入していくアメリカの緊張した雰囲気と呼吸を共にするような張り詰めた文体が特徴的である¹。1919年

1 ボーンの論文の中で、特に第一次世界大戦に密接に関わるものとして次のようなものがある。“Below the Battle,” *The Seven Arts* 2 (July 1917): 270-77; “The Collapse of American Strategy,” *The Seven Arts* 2 (August 1917): 409-24; “A War Diary,” *The Seven Arts* 2 (September 1917): 535-47; “Conscience and Intelligence in War,” *The Dial* 63 (September 13, 1917): 193-95; “Twilight of Idols,” *The Seven Arts* 2 (October 1917): 688-702.

から1977年まで、ボーンの死後に編纂された論文集のすべてに「戦争と知識人」が収録されているが、唯一の例外は、ヴァン・ワイク・ブルックス (Van Wyck Brooks, 1886-1963) の編集した1920年の『文学的ラディカル歴史およびその他のエッセイ』である。自らは参戦支持の立場を取ったブルックスは、強い反戦の姿勢を貫いたボーンの政治的見解から一定の距離を置きたいと考えたのかもしれない。しかし、そのブルックスも1956年の改訂版ではこの論文を新たに収録している²。いずれにせよ、様々な世代の論文集の編纂者たちによって「戦争と知識人」が選定されてきたのは、この作品が、時代を超えた本質的な問いかけを発しているからに他ならない³。

この作品においてボーンは、自国の国益を超越した普遍的な理念に基づいて真理、正義、美を追究することを自負していた知識人の多くが積極的に戦争に加担していく現象に批判の矛先を向けた。したがってこの論文は、知識人の生き方を問いかけるという意味で、ボーンの個人としての生き方や信条と切り離

2 ボーンの死後に編纂された論文集には James Oppenheim, ed., *Untimely Papers* (New York: B. W. Huebsch, 1919); Van Wyck Brooks, ed., *History of a Literary Radical and Other Essays by Randolph Bourne* (New York: B. W. Huebsch, 1920); Carl Resek, ed., *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915-1919* (1964; New York: Hackett Publishing Company, 1999); Lillian Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne* (New York: E. P. Dutton, 1965); Olaf Hansen, ed., *The Radical Will: Randolph Bourne* (New York: Urizen Books, 1977) などがある。なお、ブルックスの編集になる1920年の論文集は、収録論文に変更が加えられた改訂版が、*The History of a Literary Radical & Other Papers by Randolph Bourne* (New York: S. A. Russel, 1956) として出版されている。ボーンとブルックスの関係については、Casey Nelson Blake, *Beloved Community: The Cultural Criticism of Randolph Bourne, Van Wyck Brooks, Waldo Frank and Lewis Mumford* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990) などが参考になる。

3 ボーンが第二次世界大戦中のドワイト・マクドナルド (Dwight Macdonald, 1906-1982)、およびヴェトナム戦争に関するノーム・チョムスキー (Noam Chomsky, 1928-) の反戦思想に与えた影響に関しては、例えば、Tom Curtis, “Bourne, Macdonald, Chomsky, and the Rhetoric of Resistance,” *Antioch Review* 29 (summer 1969): 245-52 が参考になる。

せない個人的かつ政治的な反戦論なのである。ボーンにとって、「支配的」階級が領土や天然資源の確保を目的とする戦争に積極的になり、また普通の庶民がプロパガンダと徴兵という現実的な法的強制のために否応なく戦争マシンの歯車の一つになってしまうことは自明のことだった⁴。それに対して、なぜ、知識人は自らの理想と背反するはずの戦争ヒステリアに巻き込まれていき、自らを戦争の積極的な遂行者、あるいはその理論的支柱であり、これは「私たちの戦争」だと主張するまでに大きな「変節」を示すのか。そこにいたる心理的、また思想的合理化の過程を解明することが、この論文においてボーンが試みたことだった。参戦にいたるウィルソンの政策や国際情勢に関する分析はボーンの他の論文ではなされているが、「戦争と知識人」の焦点はあくまで知識人と戦争との関わりである。しかもボーンは、第一次世界大戦勃発時あるいはそれ以前から好戦的立場をとっていた主戦論者たち(warmonger)にではなく、自分と同じような理想を共有していたはずの知識人の先達、あるいは仲間たちに向けて語りかけているのである。

それでは、ボーンがかつて尊敬し、思想的共同戦線を張っていた知識人たちとはどのような人びとだったのだろうか。1909年にボーンが23歳でコロンビア大学に入学した頃、そのキャンパスは、「もう一つのルネサンスがまさに始まろうとしているような」⁵知的活気に満ちていた。哲学ではジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)、歴史では、チャールズ・ピアード(Charles

4 戦争と階級、経済利害、国家権力との関係を論じた未完の論文が、この点に関して最も詳細なボーンの考えを表わしている。Randolph Bourne, "Unfinished Fragment on the State," Oppenheim, ed., *Untimely Papers*, 140-230; Randolph Bourne, "The State," in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 65-104を参照されたい。

5 Lloyd Morris, *Threshold in the Sun* (New York, Harper & Brothers, 1943), 80. ボーンのコロンビア時代を詳述したものとして他に Bruce Clayton, *Forgotten Prophet: The Life of Randolph Bourne* (1984; Columbia: University of Missouri Press, 1998), Chapter 2 ("The View of the World from Morningside Heights") などがある。

Beard, 1874-1948) とジェイムズ・ハーヴィー・ロビンソン (James Harvey Robinson, 1863-1936) が人文系の学問に新風を起す一方で、フランツ・ボアーズ (Franz Boas, 1858-1942) やフランクリン・ギディングズ (Franklin Giddings, 1855-1931)、ジェイムズ・M. キャテル (James McKeen Cattell, 1860-1944) などが、人類学、社会学、心理学を新たな学問分野として確立させようとしていた。この学際的でコスモポリタンな学問の府で、ボーンは、社会主義的な信条をもった中西部からの友人と知り合い、ビアードの歴史の経済主義的解釈に触れ、歴史のなかでの知識人の役割を重視するロビンソンから薫陶を受け、さらに、デューイの授業を通してプラグマティズムの洗礼を受けた。但し、伝記作家のシャーマン・ポールによれば、ボーンのプラグマティズムへの関心は、デューイよりもむしろウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) の影響が強く、「人間の根源的で精神的な力が驚くべき復活を遂げるような」、「流動的で相互に浸透しあう創造的な」ジェイムズの世界に惹かれたという⁶。ボーンにとって、プラグマティズムは、可変的な世界のなかで社会改善の目的意識をもった人間が、自己変革と社会変革の実験を果敢に行うための思想的根拠を提供するものだった。

コロンビア大学で1913年に社会学の修士号を取得したボーンは、一年間のヨーロッパ留学の後に1914年にアメリカに戻り、ビアードやロビンソンの計らいで、創刊されたばかりの週刊雑誌『ニュー・リパブリック』のスタッフに加わる。この当時の進歩的知識人を主たる読者層とした雑誌が、社会人となったボーンのジャーナリストあるいは文芸・時事評論家としての活躍の舞台となった。この時期にはインディアナ州の工場町ゲーリーに導入された実験的

6 Sherman Paul, *Randolph Bourne* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1966), 24. ジェイムズの影響については Clayton, *Forgotten Prophet*, 69-73 を参照されたい。なお、ボーンの伝記的背景については、拙稿『『文学的ラディカル』の歴史』(ランドルフ・ボーン) — 翻訳と解題』『英文学評論』81 (2009年): 93-123 を参照されたい。

学校の特集記事を担当するなど教育問題に強い関心を向けている⁷。『ニュー・リパブリック』の創刊者ハーバード・クロリー(Herbert Croly, 1869-1930)、創刊時から1917年まで編集を担当したウォルター・リップマン(Walter Lippmann, 1889-1974)、そしてかつての恩師デュースの構想する進歩主義的で文化多元主義的なアメリカに、ボーンは未来の希望を託したのだった。1916年7月には、『アトランティック・マンスリー』に「狭量なアメリカ主義」を超えた「国際的な国民」(international nation)を創り出すことを提唱した「トランス・ナショナル・アメリカ」や、同年12月には『メノーラ・ジャーナル』にユダヤ系知識人のアメリカへの貢献を高く評価する『ユダヤ人とトランス・ナショナル・アメリカ』を発表している⁸。このようにしてボーンは、ヨーロッパでの戦争の勃発によって顕現化された狭量なナショナリズムの危険に警鐘を鳴らしたのである⁹。同時に、1916年7月に『ニュー・リパブリック』に掲載された論文「徴兵制の倫理的代替物」において、「臨戦態勢の唱道者は巨額の金を普遍的でも、教育的でも、生産的でもない徴兵制に費やそうとしている」と指摘し、「我々に必要なのは死に方を学ぶことではなく生き方を学ぶことであり、破壊のための技術者になることではなく、教師や創造者になることだ」¹⁰と主張したのであった。1910年にウィリアム・ジェイムズが「国際的和解のための協会」(Association for International Conciliation)から依頼されて執

7 教育関係の記事は、Randolph Bourne, *The Gary Schools* (Boston: Houghton Mifflin, 1916)に収録されている。

8 Randolph Bourne, "Trans-National America," *Atlantic Monthly* 118 (July 1916): 86-97; Randolph Bourne, "The Jew and Trans-National America," *Menorah Journal* 2 (December 1916): 277-84.

9 ボーンのナショナリズムに関する姿勢を扱ったものとして、拙稿「ランドルフ・ボーン再考—第一次世界大戦下のアメリカ知識人」『アメリカ史研究』27 (2004): 20-34を参照されたい。

10 Randolph Bourne, "A Moral Equivalent for Universal Military Service," in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 147, 146.

筆したパンフレット「戦争の倫理的代替物」¹¹からインスピレーションを得て書かれたこの論文は、ボーンの中で、人間の自由な意思や能動的活動を重視するプラグマティズムの精神と平和主義、教育理念、生の思想とが密接に結びついていたことを示している。

ボーンは、1916年に『耐久的平和に向けて』という本を編纂した。これは、コロンビア時代の恩師ギディングズの序文、ジェイン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935)、コロンビア大学の学長ニコラス・マレー・バトラー (Nicholas Murray Butler, 1862-1947)を始め、ロマン・ロラン、ウォルター・リップマン、その他アメリカやヨーロッパの社会主義者や平和主義者の平和への提言を収録したものであり、ボーンが書いた序文には、「この本の目的は、永続的な平和を生み出すような条件で戦争を終結させるための最も希望に満ち、かつ建設的な議論を提示するものである」¹²と記されている。ボーンはさらに、「民主的管理委員会」(the Committee for Democratic Control)のリーダーとなり、反戦広告や参戦の是非を問う国民投票を呼びかける訴えを新聞や雑誌に掲載した¹³。

11 William James, "The Moral Equivalent of War," in *Essays on Faith and Morals*, selected by Ralph Barton Perry (New York: Meridian Books, 1962), 311-28. このエッセイの初出と転載は以下のとおりである。Association for International Conciliation, Leaflet, no. 27, 1910; *McClure's Magazine*, August 1910; *The Popular Science Monthly*, October, 1910.

12 Randolph Bourne, ed., *Toward an Enduring Peace* (New York: American Association for International Conciliation, 1916), xv.

13 "Do the People Want War?" *New Republic* 10 (March 3, 1917): 145. Advertisement, signed by Bourne and others of the "Committee for democratic Control." こうした反戦広告は、1917年の2月10日、17日、3月31日も書かれ、ボーンを始め、エイモス・ピンチョット (Amos Pinchot)、マックス・イーストマン (Max Eastman)、ウィンソロップ・レイン (Winthrop D. Lane) などの署名があった。議会に参戦しないように働きかけることを世論に訴えるものだった。Paul, *Randolph Bourne*, 39; John Adam Moreau, *Randolph Bourne—Legend and Reality* (Washington. D. C: Public Affairs Press, 1966), 143-44などを参照されたい。

先に「戦争と知識人」を、ボーンの個人としての生き方や信条と切り離せない個人的かつ政治的な反戦論であると述べたが、彼の「永続的平和」の探求は、個人としての自由な生き方の探求と切り離せない関係にあった。アングロ・サクソン系の比較的裕福な中流家庭に生まれたボーンだが、父の事業の失敗、出奔などに伴う不遇に加えて、出産時の手術の失敗と幼少時の脊髄肺炎のために背中が曲がり、発育が止まるという障害を負っていた。祖母や叔母の方針で健常者と変わらぬ教育を受け、内気な少年時代を克服すると、次第に「書くこと」、また友人たちと自由に「話すこと」を通して生きることの充実感を獲得していった。ボーンにとって、ジェイムズのプラグマティズムがとりわけ魅力的であったのは、それが、人間や環境が可変的で柔軟であり、意志をもつ人間の自由な選択が許されるような世界を構想し、その実現のために人間が能動的に活動することを促していると感じたためだった。彼にとって、戦時の「強制的」状況は、「個人のプラグマティックな良心」の活動を不可能にするものだった。ボーンは、1917年9月に隔週刊行の総合文芸誌『ダイアル』に発表した「戦争における良心と知性」という論文で、「戦争の只中では、目的の選択、そして方法の選択の余地がなくなってしまう。この事実こそ、創造的知性を掲げる哲学者は、どんな目的のための手段としても戦争を用いることに反対すべき究極の論拠である」¹⁴と書いている。ボーンは、戦時の生み出す国民一体化の論理は、個人の選択や言論の自由および多元的な包摂の論理ではなく、思想的異端者、移民、徴兵拒否者、そして非健常者などを不適格な国民として排除する論理へとつながっていくと考えていた。参戦支持に傾いていく世論が「健全な」愛国心や男らしさを喧伝する中で、身体的にまた思想的に「健全な」アメリカ人のカテゴリーから外されていくマージナルな人間の一人としても異議申し立てをせずにいられなかったのではなかろうか。ボーンが平和を

14 Randolph Bourne, "Conscience and Intelligence in War," in Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne*, 131.

希求したのは、個人が自由にその可能性を伸ばせるような寛容な社会は戦時体制の中からは生まれてこないという確信があったからに違いない。

こうしたなかで、ボーンがその同盟者とみなしていた進歩的知識人、特に『ニュー・リパブリック』の編集者たちは、戦争への態度において「漂流」を続けていた。1916年の初めには、撤退と後退を意味する「消極主義」(passivism)の対立概念として、「世界を改善するためにその影響力を用いるような」目的をもった「攻撃的平和主義」(aggressive pacifism)を唱えていたが、ドイツによる潜水艦攻撃が激化した1917年の2月には「ドイツを文明に引き戻すために戦わなければならない」との論調に変化した。さらに、戦争への参加は、国内諸機構の効率的で民主的な再編を可能にするという参戦支持論が展開され始めたのである¹⁵。そして、議会が参戦を決議した後の1917年4月14日号の『ニュー・リパブリック』には、「誰が参戦を決意したのか」という無署名の論説が発表された。この中で編集者たちは、参戦を選んだのは「平和主義者の主張するように」武器製造業者などの一部の資本家ではなく、進歩的知識人たちの自由意志による合理的判断だったと説明した。「戦争のための効果的で決定的な仕事は知識人として総称されるべき階層によって達成されてきたのである」と編集者たちは胸を張って見せたのである¹⁶。長く社会改善の理想を共にしてきた知識人たちが、このように姿勢を転換し、戦争推進における自分たち知識人の役割を強調し始めたことは、ボーンにとって衝撃的なことで

15 “Aggressive Pacifism,” *New Republic* 10 (January 15, 1916):263-5.; *New Republic* 10 (February 17, 1917), 60. 戦時中の効率的な管理体制が国内の効率的で進歩的な再編に役立つという議論は、“In the Next Four Years,” *New Republic* 10 (March 3, 1917):249-50; “A War Program for Liberals,” *New Republic* 10 (March 31, 1917): 249-50 などに見られた。『ニュー・リパブリック』と第一次世界大戦との関係については、Christopher Lasch, *The New Radicalism in America* (New York: Alfred A. Knopf, 1965), Chapter 6 で詳述されている。Paul F. Bourke, “The Status of Politics 1909-1919: *The New Republic*, Randolph Bourne and Van Wyck Brooks,” *Journal of American Studies* 8 (1974): 171-202 も参考になる。

16 “Who Willed American Participation,” *New Republic* 10 (April 14, 1917): 308-10.

あった。戦争を利用して効率的で「民主的」な集団化、社会化を図ることを提案する『ニュー・リパブリック』のプラグマティズムは、ボーンにとって、戦争を「進歩」のための「道具」として用いるという悪しき道具主義であり、従来の理想からの逸脱に他ならなかった。

ボーンに強い失望を与えたのは、『ニュー・リパブリック』の編集者だけではなかった。クレイトンによれば、「知識人、元平和主義者、元異議申し立て者、元社会主義者たちは、彼らの4月以前の確信を驚くような敏速さで投げ捨てた」¹⁷のである。4月にアメリカ社会党の大会がセントルイスで開催されると、かつてボーンがその講演を熱心に聴いたウィリアム・イングリッシュ・ウォーリング(William English Walling, 1877-1936)やジョン・スパルゴ(John Spargo, 1876-1966)などの社会主義者の知識人たちは、労働組合を主体とした一般の社会党員が参戦反対を決議するなかで、抗議の退場を選択した¹⁸。また、コロンビア大学のパトラー総長はその平和主義を撤回して、「自らのために、国のために、コロンビアのために戦争への奉仕に勤しむ」ことを勧めた。コロンビア大学では学生の軍事訓練も行われ、ボーンの友人だった英文科の教員ヘンリー・W. L. デイナは反戦集会に参加して解雇された¹⁹。ボーンがよりどこ

17 Clayton, *Forgotten Prophet*, 207.

18 アメリカ社会党は、第一次世界大戦にアメリカが参戦した1917年4月7日にセント・ルイスで臨時党大会を開き、帝国主義戦争への反対を表明する「セント・ルイス宣言」を採択した。第一次世界大戦への社会主義者の対応については、John P. Diggins, *The American Left in the Twentieth Century* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1973)に詳しい。

19 Clayton, *Forgotten Prophet*, 208-09; Edward Abrahams, *The Lyrical Left* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1986), 78-79. コロンビア大学では参戦に反対した二人の教授(J. M. Cattell および H. W. L. Dana)が免職処分を受け、歴史学者のピアードがこの措置に抗議して辞職している。デイナ教授の研究室でボーンに会った印象を綴ったものとして、Joseph Freeman, *An American Testament: A Narrative of Rebels and Romantics* (New York: Farrar & Rinehart, 1936), 108を参照されたい。

ろにしていた「愛しき共同体 (“The Beloved Community”)」²⁰ は崩れつつあった。こうした戦争へと急速に傾いていくアメリカへの失意とかつて敬愛を惜しまなかった進歩的知識人への幻滅が、「戦争と知識人」の独特なトーンを作り出しているのである。

全体としてボーンの論文は、アイロニー (irony) を一つの武器としている。アイロニーとは、「著者が実際に使われている言葉とは反対の意味を伝えようとするときの修辭的技巧」²¹ である。ボーンは、彼の批判の対象となる知識人が自画自賛のために用いる言葉をそのまま繰り返しながら、そこに彼らの自己錯誤があることを読者に気づかせようとする。「戦争を終わらせるための戦争」や「民主主義と自由のための戦争」、「栄光ある死」、「国を健康にする戦争」といったスローガンがなんの衒いもなく発せられる戦時の言語・言説をボーンは徹底的に脱構築しようとした。そこに、この論文の現代にも通じるような新鮮さとともに、ボーンの論文の日本語への翻訳を一筋縄ではいかないものにする難しさがある。したがって以下の翻訳は試訳の域を出ないものであるが、稚拙な翻訳への疑問や不満が逆に読者を原文へと連れ戻してくれれば幸いである。

なお、翻訳にあたって底本として用いた版は、Carl Resek, ed., *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915-1919* (Harper & Row, 1964) の1999年リプリント版 (Hackett Publishing Company) である。Resek は7箇所注をいれているが、加えて、その他現代の読者にわかりにくいところには注をつけた。また、言及された本のタイトルや人物名の邦訳には複数のものがあるので、混乱しやすいものには原語を注に記した。最後に、便宜上、翻訳の中の注は Resek の注も含めて通し番号として、括弧して底本の番号を記すことにする。

20 Randolph Bourne, “Trans-National America,” in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 123.

21 Benjamin W. Griffith, *A Pocket Guide to Literature and Language Terms* (Woodbury, NY; Baron’s Educational Series, 1986), 45.

ランドルフ・ボーン 「戦争と知識人」¹

戦争に対して妥協しがたい敵意を感じている我々は、現在アメリカが直面している危機のなかで、知識人たちがこぞって戦争技術の行使を支持しているのを苦い思いでながめている。社会主義者、大学教授、出版業者、『ニュー・リパブリック』の寄稿者たち、そして文筆家たちは、もはや中立状態は崩壊したことを、そして更に一億の人間たちが、あの世界中に蔓延している代物、つまり戦争へ、戦争へと駆り立てられていく心理を共有しつつあることを、競い合うように確認しあっているのだ。まるでそうすることに、自分たちの知的な面子がかかっているとでもいうように。しかも、知識人たちは自分たちの好戦的姿勢を確認することで満足しているだけではない。彼らはいまや自己満足に浸ったようで、アメリカの民主的な大衆の躊躇やぼんやりした現状認識に抗って、戦争を実現させたのは自分たちだと主張しているのだ。知識人の決断した戦争だって？ 冷厳な事実を徹底的に研究しつくした後に行き着いた冷静な道徳的な判断だと！ 世界的闘争を身近に感じるができない反応が鈍い大衆だと！ 自分たちの危険を認知するだけの知性を欠いた大衆だって？ 国民が政府の命取りになるような反抗もせずにスムーズに戦争に動員されるようになるまで、自分たちはフェビアン協会² 的な穏健な戦術で時間を稼いできたというわけか。そうした高踏な戦術を駆使して、今、自分たち先見の明のある知識人階級は、まさに人民を救おうとしているというわけか。諸外国が大衆の弱みに付け込むような策謀、はたまた、大衆ヒステリーや軍国主義的狂気を駆

1 *The Seven Arts* 2 (June 1917): 133-146.[編者 Resek による注 1]

2 フェビアン協会 (Fabian Society) は、劇作家のバーナード・ショーや社会改革家で経済学者のシドニー・ウェッブなどによって 1884 年にイギリスに創設された社会主義団体で、平和的手段によって社会主義を漸進的に広めようとした。ボーンは、参戦派に転向した進歩的知識人が長い躊躇を経て「時間稼ぎ」をしたのちに、社会主義ではなく戦争のプロパガンダを広めようとしていることを皮肉っている。

使して突入した戦争に、わが国では知識人階級が知性を使って優しく国民を導いたというのか？ 利己的目的という汚点の微塵もない戦争、民主主義の勝利を確保し世界を国際化するための戦争だと？ こういう自画像を、自意識の強い知識人たちは巧く作り上げ、そうしたイメージを人民の胸に徐々に刻みつけようとしているのだ。あの知性派の大統領によって何処ともしれぬところに導かれようとしている人民に³。

戦争へと引き込もうとする流れの外にいる我々のような知識人は、はしやぎ気味の指導層が、なぜこのような言動をおこなっているのかを解明したいと思っている。アメリカの知識層がなぜ自ら戦意高揚キャンペーンの先頭に立って、我々をあの薄汚れた戦争精神の中にどっぷりつからせようとするのか、その理由を知りたいと思う。我々は、かつて93人のドイツ人の大学教授たちが彼らの戦争を擁護するマニフェスト⁴を出したときに、アメリカの大学教授たちが示した高潔な驚きと恐怖を忘れはしない。1914年のアメリカの学

3 この導入部は、主に『ニュー・リパブリック』4月7日号の「偉大な決断」および4月14日号の「誰が参戦を決意したのか」という二つの論説への反論として書かれており、編集者の主張を反語的に復唱しながらその後の論を展開させている。『ニュー・リパブリック』編集者の前者の論説では、ウィルソンの参戦の決断は「人間の判断力が可能なかぎり慎重な考慮を経て到達した」ものであり、「連合国の大義は間違いなくリベラリズムの大義であり、耐久的平和の希望である」と書かれている。さらに「バルカンにおける帝国の衝突として始まった戦争は世界中の民主主義的革命へと発展するだろう」と編集部楽観的の見通しが述べられている。後者の論文では、アメリカの中立を犠牲にしたのは大企業の利益を優先した資本主義者だったという社会主義者の抗議に反論する形で、アメリカの参戦を自由意志で選び取ったのは資本家ではなく自分たちリベラルな知識人だったのであり、知識人こそは「アメリカの生活を形作る上で、より重要な役割を演じることになるであろう階層」であるとしている。*New Republic* 10 (April 7, 1917): 279-280, *New Republic* 10 (April 14, 1917): 308-310を参照されたい。

4 1914年10月にドイツの作家や教授は「文明世界への訴え」という声明を出した。その中で、彼らは軍当局を賞賛し、ドイツにおける戦争遂行のための活動を擁護した。
[編者 Resek による注 2]

問的な精神にとって、戦争を擁護するなどということは考えられないことだった。バーンハーディ⁵の用いたような好戦的プロパガンダに対しては悪魔の言葉でも聞いたように身をよじってあとずさりしたものだ。この同じ教授どもが、わずか2年後に、もっともらしい理由をつけて、国に徴兵制を押し付けたり、戦争がアメリカの政体に健康と再生の荒々しく粗野な血流を蘇らせるだろうなどといったおしゃべりに興じたりすると誰が想像しただろうか⁶。その時点で誰かが、徴兵されたアメリカの兵士たちを何十万人も海のむこうに送り

5 フレドリッヒ・フォン・バーンハーディ (Friedrich von Bernhardi) は、ドイツの将軍で軍事史家。彼の著書『ドイツと次なる戦争』(*Germany and the Next War*, 1912) は、ドイツによる征服戦争を喧伝し、この書は反ドイツのプロパガンダ目的で連合側では利用された。[編者 Resek による注 3]

6 ウィリアム・ジェイムズは、「戦争の倫理的代替物」の中で、好戦的な論客に言及し、「彼にとって戦争能力の保持は国民の健康 (health) を測る基準であった」(William James, "The Moral Equivalent of War," 317) と述べているが、戦争を健康、血流、血潮といった生物学的メタファーを使って論じる傾向は米西戦争以降アメリカの好戦派に顕著であった。こうした健康と戦争を結びつけ、反戦を異常、不健康と結びつけるレトリックが、ボーンの遺稿となった論文「国家」で繰り返されるアイロニックなりフレイナー「戦争は国家の健康である」の背景にあると思われる。この未完の論文の中でボーンは、「平時においては、国家の感覚というのは非軍事的共和国においては希薄になっている。というのも戦争は国家の健康を意味するのだから。国家の理想というのは、その領土内においてその権力と影響が普遍的に行き渡っていることである。(中略) その理想というのは、その政体の構成員に向かって流れていく豊かな血流である」と述べる。そして、「国家の主な役割が戦争であるならば、防衛と攻撃という不毛な目的のために、国家は国民のエネルギーの大部分を吸い取ることになる」(Bourne, "The State," in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 69, 81-83) として、好戦派の唱える健康や健全さは個人の肉体的・精神的犠牲の上に立った「国家」の「健康」維持一すなわち延命でしかないことを示唆するのである。こうした戦争=健康観に対してボーンは、「戦争日記」のなかで、「戦争から何か良いものが生まれるという一連の宗教的、政治的慰めによってではなく、戦争とはなんらの関係も持たない価値観を力強く主張することによって、人はその健康を保つのである」(Bourne, "A War Diary," in *War and the Intellectuals*, 43) と述べ、彼の求めた「健康」は国家の「健康」と厳しく対峙するものであることを示している。

だして、フランスの戦場で死なせるとでもいおうものなら、その人物は気でも狂ったと思われたことだろう。中立は誇り高いものであったあの頃を思い出してみると、このような精神的な心変わりには実に天地が引っくり返った感がある。しかし、こうした知的な変化はゆっくり、ゆっくりと進行したので、この国はそれに対するアイロニーの感覚すら持ち合わせていない。大企業のお偉方からなる戦争準備の唱道者たちによって、じわりじわり、だが辛抱づよく引き起こされていった戦争感情はさまざまな知識人グループを一つまた一つと虜にしていった。ローズヴェルト⁷の助けを借りて、囁きは単調な叫びとなり、ついにそのコーラスはすさまじいものになっていった。そのコーラス隊に加わらないことは、最初は評判が悪いという程度のものであったが、次第にほとんど淫らな行為とみなされるようになった。そして、いまや、英国の強欲な権力に対するドイツの熱烈な非難と似たり寄ったりの、反ドイツの耳障りな熱弁が人びとを煽り立てている。いうまでもなく、好戦的感情の中核は、大西洋岸に代々住んでいる金持ち階級にある。この感情は、フランスやイギリスとビジネスの面だけではなく社会的にも強いつながりをもっている連中の中で特に強いものになっている。この戦争へ、戦争へと高ぶっていく感情は、東部の中核から、全国各地の同じような階級の人びとへと広がっていき、東部の支配階級に自らのアイデンティティを重ねている各地域の上流階級にびりびりと伝わっていった。忘れてはならないことは、どの共同体においても、非リベラルで非民主的な連中たちの間でとくに、この臨戦態勢や好戦的姿勢が目立ったということだ。農民たちは本来、戦争に無関心であったし、自営業者や労働者たちは今

7 このローズヴェルトは、26代大統領のセオドア・ローズヴェルトのことである。ローズヴェルトは1904年には第2回ヘーグ大会を呼びかけるなど平和的国际組織の結成に積極的だった時期もあったが、第一次世界大戦が始まると比較的早い時期にアメリカの武力介入を呼びかけ、そのスピーチや雑誌記事は『神を恐れ自分の責任を果たせ』(*Fear God and Take Your Own Part* [1916])に収められている。Robert H. Ferrell, *Peace in Their Time* (1952; New York: Norton, 1969); Charles Debenedetti, *The Peace Reform in American History* (Bloomington: Indiana University Press, 1980)などを参照されたい。

でも冷ややかな気持ちでいる。先の選挙は、中立を貫くと約束した大統領へのこうした農民、自営業、労働者階級の信任票だった⁸。言い換えれば、知識人たちは、アメリカの中でもっとも非民主的な勢力と同盟を組んだことになる。これは、アメリカの民主主義がこれまでずっと敵とみなしてきた階級の戦争だ。こともあろうに知識人たちは、この非民主的な階級の戦争の片棒を担ぐために、旗振り役を買って出ているのである。知識人階級は、世界的自由主義や世界的民主主義というお題目を唱えて、こうした非自由主義的な軍団の先頭に立って戦争の仲間入りをしようとしているのだ。こんなことは、アイロニーという言葉が死語になった世界⁹においてしか考えられない。この戦時下の自由主義がいかに非民主主義的なものかということを指摘する者さえ、もう残っていないのだ。盲信の時代にあつては、懷疑主義はどの侮蔑にもまして最も許されないものであるからだ。

ヨーロッパで戦争が進行していた過去二年の間、この国の知識人階級は、ア

8 1916年の選挙キャンペーンで、ウッドロー・ウィルソンはヨーロッパの戦争に介入しないと公約した。[編者 Resek による注 4]

9 ボーンは大学時代に執筆された論文「アイロニーの生活」の中で、「この人生への批判的な態度」―「我々がアイロニーと呼ぶこの物事を対照的に捉える感覚は、たんなるポーズや気分転換の遊びではない。それは、幸運にもアイロニカルな気質も持った人間の感情や思想を彩る何か」なのだという。アイロニーを持った人間は、「常に批判的な神経が目覚めた状態にある。彼はいつも判断を下そうとし、まさに判断するために尽きない興味で世界を眺めている。アイロニーとは「世界に挑戦すること」であり、アイロニーの感覚を持った人間のもっとも有用な役割は、思想と行動に刺激を与え、友人たちのさび付いた手足を動かし、彼らのさび付いて軋み音をたてている心の扉をこじ開ける」ことであると書いている。Randolph Bourne, “The Life of Irony,” *Atlantic Monthly* 111 (March 1913): 357-67, reprinted in Randolph Bourne, *Youth and Life* (Boston: Houghton Mifflin, 1913), 101-131. 「戦争を終わらせるために戦争」することや「自由のために」不自由を強いることの言語的自己撞着を指摘することすら戦時では難しくなりつつあった。反戦の立場をとったボーンの『ニュー・リパブリック』での論文の発表は書評を除いて皆無に等しくなり、彼の反戦論文が掲載されたのは、短命に終わった『セブン・アーツ』および再編渦中の『ダイアル』だけだった。

メロカ民主主義の理想や意欲を研究し、明確化し、そして、単に茫洋としたものではなく様々な民族グループや伝統を統合することができるような真のアメリカニズムを発見することに時間を注ぐこともできたはずだ。彼らは、大衆心理の中でお念仏のようになった戦争を追い払い、我々の思考を閉塞させてしまう昔からの神秘的想念を撃退させるように努力することもできたはずだ。我々は、教育の偉大な波を起し、精神的な秩序の土台の上に我々の家屋を樹立するために時間を費やすこともできたのだ。少なくとも、我々は、自分たちの眼前に言下の難問を提示することはできたはずだ。もし知識人階級がこの政権の先頭に立つのだというなら、中立をもっと効果的なものにするを通じて平和を確保する方法をみつけるようにこれまでも努めることができたはずではないか。どうやったら戦争に国民を駆り立てることができるかという問題に彼らの知的エネルギーを使うかわりに、戦争という悪意にみちたテクニックを用いずに、我々の中立国としての膨大な力を駆使して、世界の他の地域の人びと、そして我々自身のために民主主義的な目標を達成するにはどうしたらいいかを真剣に模索することもできたであろう。彼らはもしかしたら失敗したかもしれない。だが、ここで強調したいのは、彼らはその努力すらしなかったということだ。まず、彼らの時間は事態の明確化や教育のためではなく、民主主義、自由主義、文明といった漠然とした理想について想いをめぐらすことに空費された。支配階級は、今口先だけでこうした理想を述べ立てているが、実は彼らにとって、こうした理想がなんら生産的なことを意味したことなどありはしないのだ。さらには、彼らの貴重な時間をあの民族の自衛本能という原初的な本能を呼び覚ますことに費やしているのだ。われわれの時代のすべてが精神的な廃墟になってしまった。こうした知識人の際立った特徴は、そのアメリカニズムというよりもむしろ強烈な植民地根性である。この国の知識人の罪は、たんに母国との絆を断ち切れない植民地気風が残っているということではない。このアメリカという国民国家が多くの民族的要素から構成されている以上、それは当然のことだ。そうではなくて、彼らが一面的で党派的な植民地根性の持ち主で

あるのが問題なのだ。知識人階級は、常にイギリス風を好み、それがもっとも受けが良かった。その一部はイギリス国王よりももっと王党派で、オーストラリアよりもずっとイギリス的だった。こうしたイギリスびいきの知識人を除いては、祖国への愛着は洗練されない大衆的なものだった。アメリカを構成しているその他の民族グループの祖国愛に対しては、誰も冷淡で関心がなかった。アメリカは、様々な国民国家からきた人びとの出会いの場になることができたはずだ。異なる様々なヨーロッパの国々の文化的な植民者である知識人階級は、ヨーロッパでは討議することのできない諸問題を徹底的に検討することができたはずだ。こういう役割を担うかわりに、大学やメディアのイギリスべったりの連中たちが最初から指揮を取り、思考のマジャー化¹⁰が効果的に進行させられたハンガリーと同じような知的状況が生じている。アメリカの知識人は、ロンドンで喜んで読まれるようなものか、英国人に戦争の目的やノウ・ハウを教え込もうとする論説と似たり寄ったりのことを言っていれば、そこそこ評判がいいというわけだ。この思想のマジャー化はその反動として、妙に不愉快で馬鹿げた印象を与えるドイツ擁護者たちを生み出し、この二つの党派が議論の場を独占しているのである。大衆や、その他の民族グループは自分たちの思いをうまく言語化することができないでいる。アメリカの世論は、戦争の始まった1914年と同様に、1917年の時点でも、こうした戦争をめぐる党派的な論争についていけないのだ。

このような知識人のやり方が不毛な結末を生むのは避けようもない。戦争の

10 19世紀はじめまで超民族的な貴族社会であったハンガリーは、19世紀初頭の言語的ナショナリズムの影響下に、従来のラテン語に代えてマジャー語を行政と立法の公用語にして、ハンガリー内でのマジャー的要素を支配的なものにしようとした。特に、オーストリアのハプスブルク家とマジャー人との間に1867年にアウスグライヒ(和協)が成立して二重帝国時代が始まると、「民族法」(1868年)が制定されるなど、ルーマニア人、クロアチア人、セルビア人を含む諸民族への抑圧的な政策が強まり、上からのマジャー化(Magyarization)が推し進められた。

間、アメリカの知識人階級は、個性的で洞察に満ちた解釈を何一つ編み出してこなかった。ヴェブランの『帝國的ドイツ』、パテンの『文化と戦争』と幾つかの演説、デューイの『ドイツ哲学と政治』、ワイルの『アメリカの外交方針』¹¹などを例外として、戦争の知的な波及効果として考えられるような創造的で価値のある作品は見当たらない。戦争の衝撃がアメリカ知識人をこれまでにない緊張状態に置いたことはたしかだ。衝撃を受けた知識人は、ほんやりと座って、行為者としてではなく見物客として思いをめぐらすばかりはなかった。オックスフォードの教授たちは臆面もなく、その知性を実に忠実に従順にイギリス政府に差出し、自国の政策の正当化の作業を買ってでたわけだが、アメリカでは事情は違っていた。アメリカの知識人は、戦争という事実に向き合うような知的訓練を受けていなかった。歴史の解釈においても、また経済的な視野の欠如という点でも、戦争に関しては心の用意ができていなかった。戦争は、近代的知性には理解不可能な巨大な闇であり、解釈を可能にする言語や用語の範疇を超えたものだったのだ。過去の出来事と現在とを結ぶ何らかの合理的解釈を必要としたアメリカの知識人は、なんとかして自分たちの気持ちにじっくり来るような説明を手探りでみつけようとした。戦争当事国の知識人たちは、既に自分たちの国が行っていることを言い訳し、正当化すればいいだけだった。彼らに与えられた課題は容易だった。しかし、中立国の知識人は、本当に真実を探り当てなくてはならなかった。多分、広い視野を求めるのは、どの知性にも酷なことなのかもしれない。我々の大学教授のなかでも、古いタイプの植民

11 ここで言及されている著者のフルネーム、本のタイトル、出版年は次のとおりである。Thorstein Veblen, *Imperial Germany and the Industrial Revolution* (1915); John Dewey, *German Philosophy and Culture* (1915); Simon Nelson Patten, *Culture and War* (1916); Walter Edward Weyl, *American World Policies* (1917). なお、ワイルの作品名をボーンは“American Foreign Policies”と書いているがこれは正確なタイトルではない。ワイルは、1914年の『ニュー・リパブリック』創刊メンバーの一人で、経済学者である。国際関係に関心が強く、ナショナリズムと帝国主義が平和の成立を危うくする過程を分析した。日本、中国、韓国を訪れ特に日本の政情の研究調査も行っている。

地根性の持ち主は、すぐさま彼らの偏見から物事を眺めるようになった。それ以来、彼らは居心地のよさを感じている。彼らは戦争から何も学ばなかったし、今後とも学びはしないだろう。しかも彼らは、事態が厳しいものになるにしたがって、自分たちの若い同僚も同じような偏見に染まっていくのを見て満足げだ。今や、平和主義者も民主主義者もひっくるめて知識人階級全体が、戦争という「とてつもない逸脱的事件」を弁明する側についたのだ。

それ故、外国で同じことが起こったときには我々にあんなにもショックを与えた過程、つまり、知識人階級が一丸となって軍事的プログラムを支持するという過程を、我々はこの国で目撃することになってしまった。ドイツの社会主義者¹²はまだしも宣戦布告後にこそこそと屈服したが、わが国の社会主義者¹³はその程度のゆかしさすらももちあわせていなかった。そして彼らが宣戦布告したときには、彼らの社会主義の知的な見せかけがいかに皮相なものであったかが明らかになった。というのも、連中は、民主主義や文明を守るためといった、巷のブルジョア雑誌から発信されたとしても不思議でないような用語を使って我々に呼びかけたのだから。まるで、社会主義者たちは何十年にもわ

12 1907年にドイツのシュトゥットガルトで開催された第二インターナショナル第七回大会では、「戦争勃発の恐れが生じた際、関係諸国の労働者階級の義務は、戦争阻止の為にあらゆる努力をすることである」との決議がなされ、1912年のバーゼル大会でも反戦の決議がなされた。しかし、1914年の8月4日、ドイツ社会民主党は議会の戦時公債に賛成の表明をし、反戦を貫くことはできなかった。

13 ボーンはアメリカの社会主義者の裏切りを強調しているが、参戦翌日の1917年4月7日に開かれた社会党臨時大会では、帝国主義戦争への反対を表明する「セント・ルイス宣言」が4分の3の賛成で採択されている。この会議では、党内の左右の対立は焦点にならず、右派と考えられていたモリス・ヒルキット (Morris Hillquit) やヴィクター・バーガー (Victor Berger)、左派のジョン・リード (John Reed) やIWWのメンバーなども、反戦の姿勢で一致した。反戦決議に反対した少数派の中に、作家アプトン・シンクレアや社会主義の理論家ウィリアム・イングリッシュ・ウォーリングなどが含まれていたことがボーンに社会主義知識人の裏切りを印象づけたのかもしれない。

たって、まさにブルジョア民主主義や資本主義文明に対して戦ってきたことは忘れたかのように。こうした知的な一体化―群集本能ならぬ群集知性は海の方こうで出現したときはあれほどヒステリーで卑屈な現象だと思われたものだった。しかし、わが国の知識人たちの心変わりは、各々の内面で起こった微妙な変化であり、それに関しては極めて理にかなった説明がついてきたのである。つまり、「われわれは、世界を従属から救うために参戦するのだ」とね。しかし、思い出してみれば、ドイツの知識人も「野蛮から文化を救うために」参戦したのではなかっただろうか。そして、フランス人は、「僕たちの美しきフランスを救うために」だった。イギリスの場合は、「国際的名誉を救う」ために。そして、人類愛にあふれ、どの国より自己犠牲的だと自負するロシアは、「小国を滅亡から救う」ためではなかっただろうか。我々アメリカ人だけが倫理的に非のうちどころがないという神がかりじみた直感はどこからきているのか。アメリカ人の自国の正しさへの確信にもかかわらず、歴史は、いずれこの戦争の背後にある巨大な経済的および帝国主義的な諸力を解明するであろう。アメリカ流の戦争の合理化もそうした巨大な力の前では、泡のように実体なく浮遊しているにすぎないのだ。ユダヤ人はよく、自分たちの民族だけが宇宙の神の真の人民として選ばれたことに畏敬の念を表わす。同じぐらいにおめでたいのが、すべての戦争のなかで我々の戦争だけが一点の穢れもなく、胸躍らせるような善を達成するだろうと語る我々の知識人ではないか。

真の意味で理性的な知識人階級なら、執拗に戦争ではなく平和を呼びかけたことだろう。何ヶ月間も必要とされてきたのは、行き詰まりを避けるための交渉による平和だった。軍事介入のために注がれた断固たる政治的手腕をもってすれば、どちらの側の完全屈服にもならないような平和が確保されはしなかっただろうか。偉大な中立国の凄腕の交渉能力は本当に活用されたのだろうか。全ての戦争がそうであったように、我々の戦争も、外交の救いがたい失敗の帰結だった。アメリカが平和のために演じた役割は有名無実なものになった今となっては、知識人たちは厚顔な態度をとることにしたのだ。消耗戦を最後まで

続けるために武力を用いることに賛成している知識人たちは、ではなぜ、いままですら強制的に早急な平和を世界にもたすために力を用いることに躊躇したのかを説明する必要があるだろう。

未来をしっかりと見据えていると自負する彼らのビジョンは、「理性的」とされた彼らのこれまでの判断と同じく説得性に欠ける。「我々は今世界を国際化するために参戦する」と彼らはいふ。しかし、彼らの平和強制リーグ¹⁴は誰の目からみても非現実的だった。千年王国の到来を待ち望む黙示録の予言のようにね。あるいは、サンディカリストがいつか起こると期待している「ゼネスト」みたいなものかもしれない。それは、合理的なプログラムというよりは、国際秩序実現にたいする信念と情熱を掻き立てるという目的のための輝くシンボルだった。少なくともそういうシンボルであり続けている間は、それなりの実際的な価値を持っていた。しかし、それがいまや、この戦争を正当化し、相互の恐怖に基づく世界秩序を樹立するための国際組織を樹立するために——その理想主義的で輝かしい砂上の楼閣を実現するために活動するというなら、危険で胸のわるくなるような代物だ。理想主義とは、本当に理想的なもののために大事にとっておくべきなのである。誰も異論を唱えられないほど強力な一つの世界を創造することがアメリカの知識人の当座の理想だというなら、考えるだけで気が滅入る。もし、平和強制リーグはたんなる一時しのぎ、秩序を回復

14 1915年に無党派のグループとして組織された「平和強制リーグ」(League to Enforce Peace)は戦後の国際連盟(league of nations)の設置をよびかけた。それは、戦争を仕掛けようとする加盟国に経済制裁かあるいは軍事力行使を行うとするものだった。[編者 Resek による注5] 歴史家マール・カーティによると、この組織の中核となったのは、アメリカの27代目の大統領(1909-13)のウィリアム・タフト(William Howard Taft)、法律家でベルギー大使を務めたセオドア・マールブルグ(Theodore Marburg)、ジャーナリストのハミルトン・ホルト(Hamilton Holt)のような人びとであった。ウィルソンは1916年の5月27日にこのリーグの集会で、その方針を支持する演説をしている。Merle Curti, *Peace or War: The American Struggle 1636-1936* (Boston: J. S. Canner and Company, 1959), 201, 237-9を参照されたい。(訳者による補足)

するために我々が参加する連合体であるというなら、現状を追認しているだけにすぎず、その構想はその程度のものとして扱われなければならない。しかし、もしそれが実際、今後の紛争解決に具体的展望を与えるものであり、アメリカの政策の要だというなら、そんなものは実現不可能だし望ましくもない。というのも、このようなプログラムには、各国の国民がダイナミックに発展していく可能性や、国際的な経済正義の問題が考慮されていないからだ。政治的国際主義よりも経済的国際主義を必要としている世界にあって、各国を政治的および経済的な単位として固定化し、そこから世界連邦を作り出そうとする提案は反動的ですらある。国際秩序のためのこうした計画は、アメリカの政策の正当化に過ぎず、眉唾ものである。もし、真に国際的な至福が達成されるだろうという信念に基づいて政策が決定されたならば、今後同盟国は国際秩序の原則を尊重するという厳かな合意と引き換えに参戦したはずである。もし我々の戦争が、互いに約束を遵守するような高潔な連盟を樹立することで、戦争を終わらせようとしているというのであれば、空手形のまま参戦し、最終的和平交渉においてこっぴどく失望させられたり、妥協を余儀なくされたりするという無謀な賭けに打って出る余裕が果たしてあったのだろうか。だが実際のところは、我々は戦争に突入してしまい、そのような厳かな国際秩序遵守の合意は結ばれていなかったばかりか、提案されることすらなかったのだ¹⁵。

15 初期の未発表の原稿では、ボーンは次のように書いていた。「第一に、加盟国が紛争の調停を申し出る前に平和を破った場合に、連盟は武力を使って結束して平和を遵守させるということになると、そうした国に対して他の全ての諸国が連合することになり、アメリカ合衆国はこうした条件の下では、我々が全く関わりをもっていない戦争に参加せざるを得なくなるのではなかろうか。もし、連盟が、酔いを醒ましたドイツを加えて現存する国家間連携の基礎のうえに築かれるなら、そうした連盟は、1871年から1914年までヨーロッパに存在していた武装休戦状態と本質的に変わらないのではないか。そのような連盟は、どういう状況下でも、互いの現状維持を保証しあうだけのものになってしまうだろう。(「平和の強制についての疑問」、ボーン文書、コロンビア大学図書館)。」[編者 Resek による注 6]

したがって、知識人たちの自己弁護は、特別な意味でのみ理にかなっているといえる。彼らは、正義の平和を強制するために、あるいは少なくともアメリカの政策を遂行するために戦争以外の方法を考案することに、そのエネルギーを使うことができたはずだ。我々が積極的に参加することでどうやったら自分たちの望む国際秩序が本当に実現できるかを考えることに、その知的エネルギーを注ぐこともできたはずだ。しかし、知性はそのように使われはしなかった。それは、無責任な戦争へと無関心な国民を導くために用いられたのだ。しかも、同盟国は大義を掲げ、その救済のために馳せ参じているわけだが、彼らが戦後に新たな国際秩序を遵守するという保証はまったくないのである。それゆえ、アメリカの知識人は、過去の考察においても、未来の洞察においても、理性的だったとはいえないのである。それ故、本当のところなぜ彼らは参戦支持に回ったのかを解明するためには、知的な言い訳の下に隠されている感情的な傾向を見なければならない。彼らは何を考えたかよりも何を感じたかをみることで、我々の知識人階級の実態を解明することができる。彼らの多くがイギリスに対して植民地的な共感を覚えたとはいえ、世界戦争は知識人階級に個人的な衝撃を与えた。それは、世界が進歩に向かって進んでいるという彼らの先入観を踏みにじるようなものだった。この戦争は、知的生活を筋の通った脈絡のあるものし、それに感情的な一貫性を与えていた人道的な国際主義や民主主義的なナショナリズムをゴミ屑同然にしてしまった。彼らは突如、新しい道を探さねばならなかった。そこには心理的な葛藤があった。母国との繋がりを断ち切れないという潜在的な植民地根性と、一つにまとまったアメリカを作り出そうとする夢との間には葛藤があった。平和への願いは、世界において責任を果たしたいという国家としての野望とせめぎあった。紛争からの精神的孤立というあの初期の高尚で、隔絶し、必ずしも不健全とはいえない感情は長くは続かなかった。世界のほかの国々でまさに進行している壮大な体験に自分たちも加わりたいという逸る気分もあった。自分たちの足元の資本主義的平和の中で起こっている惨状にはいっこうに心を動かされなかった多くの知的な人びと

が、ベルギーでの戦時中の恐ろしい出来事¹⁶に震撼し、眠りから覚まされた。国内では、労働組合の闘争にも抑圧された大衆にも排除された人種にも無関心だった人びとが、その長い間使われないままになっていた人道的な同情心を一気に抑圧された諸国民やヨーロッパの収奪された村々に注ぎ始めた。自分の国での民主主義的な活動を侮蔑の念で眺めていたお歴々は、海外での自由のための戦いに胸を高鳴らせた。これらはとりたてて珍しい現象でないが、困ったことに自分たちの責任ということをむやみに誇張しすぎるきらいがあった。そして、彼らの思考は混乱したものとなった。我々の国を細部にわたって平和にふさわしいものにするという課題は放棄され、戦争の遂行や諸政府への軍事、社会、政治の全般にわたる助言などが優先されるようになった。そして次第に、過ちをおかしやすい兄弟同胞を自由と民主主義の光へと導くことが、アメリカ国民が神から賜った役目であるという確信が植えつけられていった。つまり、戦争が彼らの従来の理想をがたがたと崩してしまったために、その小さな胸には様々な心理的な葛藤の嵐が渦巻いたのであるが、その葛藤の中からなんら建設的な考えは生まれなかった。アメリカの知識人階級は戦争という危機に直面して、創造的な態度を確立することに失敗したのだった。

心的葛藤は新たな高次の統合をもたらすか、さもなくば、原始的な思考への回帰をもたらす。こうした原始的な思考から我々はすっかり卒業したはずなのだが、自分たちが達成しようとした地点を見失ったときには、そこにまた戻っていくのだ。戦争は、アメリカの若い世代が必要としなくなっていた雲をつか

16 1914年8月3日にドイツ軍は中立国ベルギーとの国境を超え、これを受けて翌日イギリスがドイツに宣戦布告した。ドイツによるベルギーの中立侵犯は国際的な憤激を買い、ドイツ軍による女性の強姦や赤ん坊の殺戮などの情報が根拠のないものも含めて大量にアメリカのメディアに伝えられたことで、「残酷な」ドイツ人のイメージが流布されたと共に、ベルギーの子供や女性を救済するべきだというアメリカの世論が高まった。こうした「人道的な」アメリカ人が、国内の人種差別や労働者への経済搾取などには無関心だったことをボーンは皮肉っている。John Whiteclay Chambers, *The Tyranny of Change*, 2nd ed., (London: St. Martin's Press, 1992), 217-218などを参照されたい。

むような理想を再燃させている。実は、この世代はもの欲しそうな子供っぽい段階を過ぎ、理想を現実の諸制度の中で実体化する具体的な方法を発見しつつあったのだ。だが、戦争の衝撃のために、彼らはそうしたプラグマティックな事業を頓挫させ、あの昔からの理想の中にどっぷりと浸ってしまった。そこには、われわれの原始的なヤンキーのほら吹き癖が精妙に形を変えて復活した感もあった。成熟したはずのアメリカが、揺籃期に戻って、われわれの共和国の諸制度を世界が模倣してくれることを期待しているかのである。外交における行政的な無責任さや議会によるコントロールの欠如が際立つ我々の連邦制は、我々が自治の術を教えようとしているドイツ帝国政府に、実は似通っていることを無視しているのは、ちゃんちゃらおかしいことだ。そして我々は、アメリカの民主的な知識人たちが、イギリス保守党の歴代の首相の中で最も嫌われている御仁に、「リベラル」な同盟者として変わらない賞賛を捧げているという、この上ないアイロニーに気づいてはいない。はたまた、アメリカの反動政治家の中でも一番嫌われている古株をロシアへのアメリカ民主主義の宣教師として選ぶということのアイロニーにも気づいていないのである¹⁷。

このような事態を生んでいる知的状況とは、より原始的な思考方法への回帰が起こっている状態だ。単純な演繹的推論が分析に取って代わり、物事の実体ではなくラベルが問題となり、自分が見たいものだけを見るという有様だ。高次の統合を生み出すことに失敗したアメリカの知識人は、直ちに単純化された

17 ここで言及されているのは、1917年4月にアメリカ合衆国へのイギリス戦争使節団を率いた当時の外相で元首相のバルフォア卿(Lord Balfour)と、同じときに、革命下のロシアへのアメリカ使節団長に任命されたエリフ・ルート(Elihu Root)のことである。[編者 Resek による注7] ルートはマッキンリーとセオドア・ローズベルトの下で戦争大臣(1898-1904)、ローズベルト政権の二期目(1905-09)の国務長官を務めた。世界の未開民族を文明化するアングロ・サクソンの使命を説き、アメリカの世界強国としての威信と積極的対外政策を主張するエリート政治家、学者の一人だった。一方で、国際機関の設立に貢献したとして1912年にノーベル平和賞を授与されている。(訳者による補足)

行動に移せるような思考へと退行している。思想は、現実に関わりつつあること、あるいは明日不可避に起こるであろうことを安易に合理化しようになっている。確かに、いくつかのグループは彼らの植民地根性を合理化しようとして、イギリス海軍は絶対不可侵であるという原理と、平和リーグの掲げる国際秩序の原理とは矛盾しないと強弁している。しかし、心的葛藤のこうした手っ取り早い解決は、より高い統合へと創造的に発展していることにはならない。それは次第に、我々の参戦の正当化とごったになってしまった。それは、宣伝に用いられるような硬直した教条的なものになっていった。批評は停滞し、感情的なプロパガンダが始まった。しかしながら、社会主義者、大学教授、文筆家たちのほとんどは、この程度の統合にさえも到達しなかったのだ。彼らの心的葛藤はもっと単純に解消された。つまり、「民主主義のための戦争」というわけだ。これだけで、彼らの哲学を要約できそうだ。彼らは、原始的な思考へと退行し、それは気づかないうち、行動を求める欲求へと形を変えていった。戦争は、彼らを、どっちつかずの状態から解放してくれるまたとない機会となった。ついに、行動と無責任が始まり、平和の理想を、地獄に引き寄せられていく世界と和解させるという不安で極めて困難な試みは終りを迎えた。事実をそのあるべき姿へと適応させようとする痛みを伴う作業にも終止符が打たれた。さあ、事実を理想として祭壇に祭りましょうというわけだ。さあ、はずみがついてどっと戦争に傾きつつあるその流れに加わりましょうというのだ。躊躇、アイロニー、良心、配慮などといった面倒なものは、何か攻撃的でとてもない大きなことをやるという壮大なファンファーレの中に飲み込まれてしまった。やっと取り戻した安息日に味わう「戦争をしていることの平穏さ」¹⁸というわけだ。多くの知識人が嬉々として批判の矛先をおさめ、この流れに身を任せたその様は、逆説的に彼らのそれまでの躊躇と宙吊り状態を露呈してい

18 ここで言及されているのは、ローレンス・パーサル・ジャックスが『ニュー・リパブリック』に書いた「戦争中であることの平穏さ」という論文である。Lawrence

るともいえる。最近では、アメリカの大学はきびきびした楽しい場所となっている¹⁹。複雑にからみあった思考にとってかわったのは、単純な、疑問を呈することのない行動である。思想家たちは、リアリティをその乱舞の相手に選んだのだ。

もっぱら知的な宙ぶらりん状態への恐れから戦争を受け入れた人びとはどのぐらいいたのだろうか。知性があれば、判断を差し控えているというどっちつかずの状態にも耐えられるはずだと考えるのは間違いである。知性は確実性を求めるものだ。知性をしなやかで柔軟なものにしておくのには努力がいる。危険や大災害の時には、我々は絶望的な気持ちから、なにかのドグマに飛びつき、それにしがみつこうとする。我々が従来の姿勢を持ち続けようとして、その緊

Pearsall Jacks, "The Peacefulness of Being at War," *New Republic* 9 (September 11, 1915): 152-54; reprinted in Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne*, 103-06. ジャックスは、ユニタリアン派の牧師でオックスフォード大学マンチェスター・カレッジの学長だった。1913年から14年にかけてのヨーロッパ留学中に、ボーンはジャックスに会う機会があった。この論文は、「過去一年の間にイギリス人は皆、共通の目的を持って生活するようになった。目的そのものは好戦的なものだが、心の中は以前より平和だ」(Schlissel, ed. *The World of Randolph Bourne*, 103) という文で始まる。さらに彼は、参戦後のイギリス人は、「不確かさの中で眠れない夜を過ごし、あれやこれや色々やってみた末に、ついに一つの使命を、自分の体と魂を捧げることのできる大義をみつけたときに万人が感じる心の平和」(Ibid., 105) を感じていると述べている。

19 第一次世界大戦へのアメリカ参戦が決定される1917年4月までに、コロンビア大学を含めたアメリカの大学では、戦争に備えての軍学共同体制が整っていった。例えば、コロンビア大学の機械工学部や電気工学部は、1917年2月頃から施設を海軍が使用することを認め、同じ月にはハーバード大学で、「軍事問題に関する委員会」が設置されている。当時コロンビア大学の学生だったジョゼフ・フリーマンが回想しているように、コロンビア大学のキャンパスでは予備兵のための軍事訓練も行われていた。Clayton, *Forgotten Prophet*, 208-209; Freeman, *An American Testament*, 81-135. ボーンが大学が「きびきびした」(brisk) 場所になったと書いたのは、アメリカの大学全体の戦時における変化、とりわけ、かつて進歩的知識人の牙城であったコロンビア大学の変貌ぶりを独特のアイロニーをこめて語ったものである。

張から疲れて神経がまいってしまうような時、我々は、すぐに行動に転化される何らかの教義を掴み取って、なんともほっとした癒しの感情に浸るのである。中立は宙ぶらりんを意味していたので、それは擦り切れた神経には憎しみの対象となったのだ。「平和強制リーグ」の「武力介入」へと具体的行動をよびかけるスローガンは、こうした擦り切れた神経の持ち主たちにすぐさま飛びつけるドグマを提供した。戦争がおこると、世界は宙ぶらりん状態から俄かに活動の場となり、思索はくもの巣のように取り払われてしまう。自衛の感情、すなわち何百万という人びとをヨーロッパで起こっていることに釘付けにしたあの聖なる感情も介入してくる。戦争が始まっても少数の人間は当初は批判的ポーズを保っている。彼らは、次はこうした行動をとりなさいと大衆に向かって助言している気であるが、往々にしてそうした助言はすでに一般の人びとがとっている行動を追認しているにすぎない。彼らの批評とはたんに大衆の感情の動きの後を追って、それにもっともらしい理由をつけているだけである。

戦争が知識人階級にどのような結果をもたらしたかは、すでに明らかである。彼らの思考は、現実には起こっていることを言葉にし、正当化する程度のものにすぎない。彼らは、まだゆっくりと熟考し続けている人間に急に敵意を示すようになる。戦争が始まってしまうと、個人的な思惟は無力であり、我々は大きな車輪の一つの歯車としてのみ意味があるという確信が広がっていく。行動に参加しないのは良くないことだということになる。我々は、誰も気に止めない役にもたない涙を拭いて、いざ偉大な事業に飛び込めと忠告される。単に全員が隊列に加わることを強いらられるだけでなく、そうした新たな揺るぎなさが理想化されるようになる。彼らは、高貴なりアリズムの立場から、不毛な妨害行為や、事実面に直面することを臆病に拒否する人びとを糾弾するのだ²⁰。こういう現実主義的な言辞を弄した大言壮語が声高に鳴り響くと、はたして彼

20 妨害行為とは、軍が志願兵をリクルートする活動などを直接行動、あるいはビラなどの配布によって阻止することをさしており、「国家」のなかで、「軍国主義と国家と

らのいうリアリズムというのは常に厳格、かつ知性的に現実と取り組むことを意味するものなのだろうかと考えてしまう。むしろ彼らのリアリズムは、単に現実身に身を任せること、知的な宙ぶらりん状態に疲れきって理想を放棄してしまうことなのではないだろうか。平和主義者たちは、事実と直面することを拒否しているとか、個人的な感傷の世界に閉じこもってしまっているなどと、痛烈な叱責を浴びせかけられる。しかし、事実と異議を唱えたり、批判したりしようとしないうリアリストのほうが、最低限の抵抗の構えを見せている人々より優れているなどということがあるだろうか。リアリストは、現に動いている諸力と結びつくことで、自分たちは少なくとも物事をコントロールすることがで

の離れがたい結びつきは、陸軍や海軍に対する妨害活動を最も重大な反政府的騒乱罪とみなす法の中に示されている」とボーンは書き、「もし、明白な行為ではなく、最も間接的な手段で軍への志願を思い留まらせるような感情を吐露したときですら、その人物は有罪となる」(Bourne, "The State," in *War and the Intellectuals*, ed. Resek, 89)と書いている。例えば、ボーンの友人マックス・イーストマンが編集に携わっていた『マッシュズ』(*Masses*)は、1917年7月号に反戦的な記事とイラストが掲載されているとして、1917年の防諜法(Espionage Act of 1917)に基づく郵送許可取り消し処分を受けている。また、社会党のユージン・デブス(Eugene Debs)などは1918年6月にオハイオ州カントンで行った反戦演説の後に治安法(Sedition Act of 1918)違反で捕まっている。ボーンは、マックスおよびクリスタル・イーストマンらと、1917年以降参戦をめぐって内部分裂した「軍国主義に反対するアメリカ連合(American Union against Militarism)」の中で「民主的管理委員会」を作り、反戦をよびかける広告を掲載する活動などをした。「事実と直面することを拒否する人びと」とは「良心的徴兵拒否者」のことで、宗教的理由、政治的理由から徴兵を拒否した人びとは、社会的な非難を浴びた。また、自らを「リアリスト」とよぶ参戦賛成にまわった戦争推進派リベラル(war liberal)のなかで、例えばデュエイのように「徴兵拒否者」を「非現実的」とであると批判したものも少なくなかった。John Dewey, "The Future of Pacifism," *New Republic* 11 (July 28, 1917): 358-60; John Dewey, "Conscience and Compulsion," *New Republic* 11 (July 14, 1917): 297-98 などがある。なお、阿部知二は、アメリカの1916年の国防法(National Defense Act)および1917年の選抜徴兵法(Selective Service Act)の両方に良心的兵役拒否者に対する戦闘免除規定があることを詳しく説明している。阿部知二著『良心的兵役拒否の思想』(岩波書店、1969年)を参照されたい。

きと考えている。多分、できるのかもしれない。しかし、戦争をコントロールすることができるかどうかという話になると、狂った象の背中に乗った子供のほうが、地上にいてその猛獣の暴走を止めようとしている子供よりも効果的かどうかは疑わしい。リアリストに転向した元人道主義者たちは、この戦争になんらの慰めも見出せないでいる者達を嘲笑する。あいつらは、きざに中立性に固執し、とてつもない思い上がりや偏屈な考え方の持ち主で、はては単に茫然自失状態であるというのだ。リアリストたちは、この戦争のお陰で色々有益な成果がありますよとお為ごかしを並べ立てる。一方ヨーロッパで実際に戦闘に従事している者たちは、一体自分たちはどうしてこんなところにいるのだろうかと自問し、その答えを求めることすら、とうの昔に諦めてしまったのだ。彼らにわかっているのは、誰もどうやって彼らを戦地から帰還させることができるのかわからないということだけだ。

しかし、この危機によって戦争の容認へと固まっていった知識人たちは、みずからを極めて戦略的な立場に追いこんだのだ。流れのなかにあって、リベラルな目的のために流れをコントロールするには、船に同乗するしかないと彼らはいふ。もし、我々が戦争妨害に回れば、我々はすべての影響力を放棄することになると。逆に、自分たちが責任をもって戦争を受け入れれば、指導力を発揮できるというわけだ。こうすれば、信頼にたる思想家として、皆が自分たちのいうことに耳を傾けることになるが、一方、戦争の遂行を妨害した連中は知的な自殺行為を犯したに等しく、外側の暗がりのなかに葬り去られるというのだ。指導的な権力者たちは、戦争の全体的方向性に賛同している知識人たちからの批判のみを受け入れるだろうというわけだ。確かに、彼らは水先案内人になれるかもしれない。しかし、彼らが現在の流れにそって漕いで行く船の行き着く先は大惨事や国民生活の疲弊であるのかもしれない。その場合は、彼らの水先案内人として役割は、せいぜい断崖の右手にぶちあたるか、左手にぶちあたるかのどちらかを選ぶという程度のものではないだろうか。しかし、そうなる前に、慰めはまだまだありますよと彼らはいふ。我々と一緒に行動しなさいと

彼らはよびかける。そうでなければ、あなた方は無視され、問題にもされませんとね。異議申し立てをした連中はすでに破門されている。彼らにとってみれば、跡形もなくなった理想の残骸の只中で身をよじって苦悩している非妥協的なラディカル知識人たちは、最も唾棄すべき、最も非生産的な連中だということになる。知識人たるもの、戦争容認の軍団に参加する以外に選択の余地はないというわけだ。しかし、ここで再び、恐ろしいディレンマが立ち現れる。仮に今進行中のことを支持するとしよう。その場合、大きな渦のなかに巻き込まれ、予測不可能な巨大な力に押しつぶされて、個人としての存在価値をなくしてしまうだろう。一方、事態から距離を置いて受身的に抵抗の姿勢をとるならば、現実という機構の外側にいるのでやはり何もできないということになる。

それでは、いまだ戦争容認の姿勢にこり固まってもおらず、宙ぶらりんを恐れておらず、かつ疲労のために魂を抜かれたような状態にもなっていない知識人に残された場所はないのだろうか。アメリカの知識人たちは、現実に関心を奪われるあまり、真の敵は帝国ドイツではなく、戦争なのだということを忘れていいる。この我々の戦争が聖戦として大衆的な神話になっていくのを阻止するためにやれる仕事はまだあるのだ。倫理的に非の打ち所のない状態で我々は参戦するのだと語りかけてくる指導者たち、「民主主義」とはすなわち共和政体のことだと主張する指導者たちに対して、我々はどうのような態度をとればよいのだろうか。だが、全ての革命的な副産物をもってしても戦争を正当化することはできないし、戦争は、人びとを苦しめるあらゆる悪の中で最も有毒な複合体であることに変わりはないと大声で叫ぶという仕事はまだ残っているのだ。戦争に全くなんの慰めも見出せない人びとや、犠牲という安っぽい感情をありがたがる連中を嘲笑している人びとは必ずいるに違いない。大粒の涙を流して渋々戦争を容認するという手の込んだ芝居を演じることもない非妥協者たちもまだ残っているはずだ。引き続き平和を呼びかける人びともいるだろうし、講和の条件はリベラルであるだけではなく民主主義的でなければならないと主張する人びともいるだろう。各国の口先だけの和平の約束を信用できず、世界中

に軍拡の火種が残されたままの平和を支持することはできないと考える知識人たちもいるはずだ。今、考案されているような、軍事的同盟に基礎を置いた「リベラル」な世界秩序²¹に反対する者たちもいるだろう。「非妥協者」は戦争にたいして非妥協的な態度を取っているが、彼らは真の意味でアメリカに対し不忠誠であるわけではない。彼らは、何に対してもネガティブな態度をとる「不可能者」でもないのだ。戦争に対する冷ややかな思いは、優れた教育を行い、優れた芸術や評論を生み出そうとする更なるエネルギーや情熱へと転化されるべきなのだ。こうしたことこそ、死の世界のただなかで、生きることの意味を与えるものなのだから。戦争に対して敵意を持ち続けている知識人は、その反戦の論陣を堅牢なものにするためにもっと大胆に進んでいかななくてはならない。古い理想は崩れさっていく。そして、新しい理想が作り出されなくてはならない。新しい理想の創造者は、その知性をはるか彼方にまで、はるか未来に向かって飛翔させ続けるだろう。もっとも恐れるのは、ただちに凝り固まってしまうことだ。もし、アメリカの知識人階級が昔からの誤謬を永続化させるような「リベラル」な哲学²²に釘付けになるとしたら、そのときは、「民主

21 平和強制リーグの提案していた国際連盟のような国際組織をさしていると思われる。

22 ここでいわれているリベラルな哲学とは、参戦賛成に回った『ニュー・リパブリック』の編集者や主要な寄稿者たち—リップマンやデューイなどが主張していた、経済機構の能率化と社会化(socialization)のために戦時体制は有益であるという実利主義的見方をさすものと思われる。ボーン自身も、教育を通じた社会化の必要を感じており、広い意味では当時の進歩的知識人(progressive intellectuals)の一人であったが、ナショナリズムと進歩主義が結合していくなかで、プラグマティズムの本来の柔軟性や個人の自由を重んじる側面が変質して単なる機能主義に陥ったと感じたようである。したがってボーンは、自分をリベラルな知識人というより「文学的ラディカル」として、また、自由、平等といった本来の民主主義的エトスの再発見者として再規定するようになったとも考えられる。デューイの立場からみたボーンとの論争の経過とその評価については、Robert B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy* (Ithaca: Cornell University Press, 1991); Alan Ryan, *John Dewey and the High Tide of American Liberalism* (New York: Norton, 1995) などが参考になる。

義者」も必要となってくる。「民主主義者」の仕事は、分断し、混乱させ、動揺させ、知的な水路に常に動きを与え、それが決して凍結してしまわないようにすることなのだ。